

十勝岳

○大正火口壁の表面温度分布およびSO<sub>2</sub>放出量

昨年に続いて2007年8月20日に山頂火口から北西に約3.3km離れた望岳台から大正火口付近の熱映像と二酸化イオウ放出量の遠隔測定を実施した。

昨年と同様に大正火口北西内壁には上下二筋の温度異常域が分布し、噴気活動も活発で、北西外壁の2ヶ所には温度異常域が認められる(図1, 図2)。表面温度分布から推定された大正火口壁からの放熱量は昨年に較べてやや増加しているものの、表面温度分布に大きな変化は認められない。また、北西外壁の異常域のうち昨年の9月に遠望されるようになった旧礫部跡の噴気は、今回の観測の際にも望岳台から明瞭に認められた。

二酸化イオウの遠隔測定では大正火口および62火口でピークが記録された。62年火口からの放出量は64~76 t/dと昨年と同程度であったが、大正火口からの放出量は昨年の1/3以下となった。しかし昨年の測定値を含め、大正火口からの放出量は背後にある十勝岳本峰の影響を受けた見かけ値である可能性が高い。

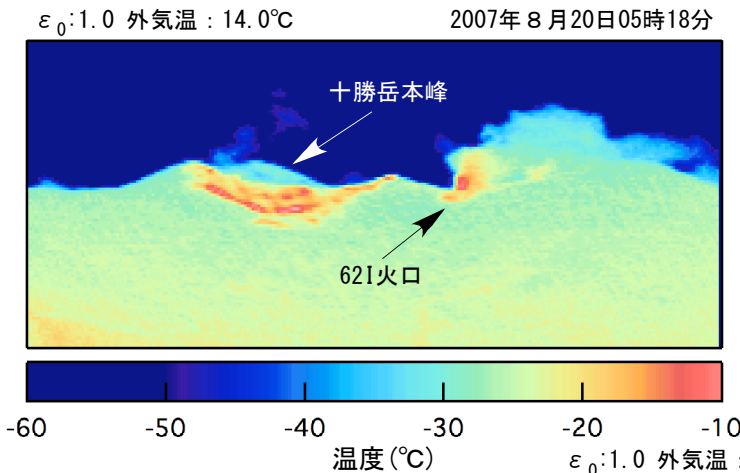


図1. 大正火口内壁および62I火口周辺の表面温度分布. 1ピクセルは12.3m<sup>2</sup>.

図2. 大正火口内壁の表面温度分布. 1ピクセル4.95m<sup>2</sup>

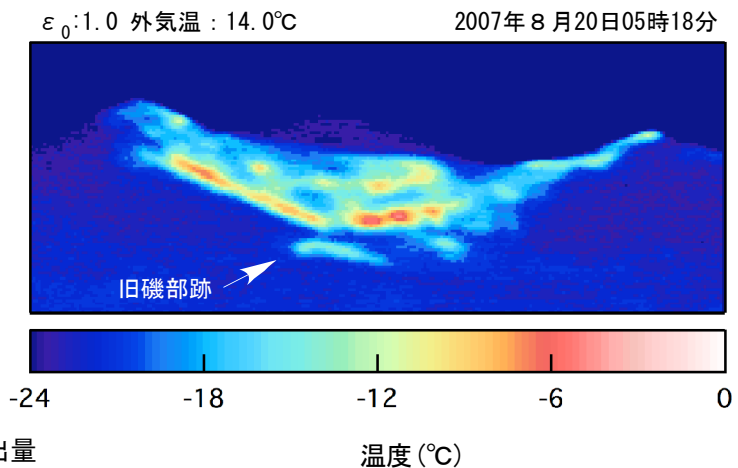


表1. 放熱量および二酸化硫黄放出量

項目	2006年8月22日	2007年8月20日
放熱量	0.9~1.3 MW	2.9~5.1 MW
大正火口	44~66 t/d	9~22 t/d
62火口	76~83 t/d	64~76 t/d
合計	120~149 t/d	73~98 t/d